

“枝幸砂金” 地帯の点描

小村幸二郎

北海道の屋根をなして南北方向に走る日高山脈の北端部に近く 枝幸郡中頓別町・枝幸町・歌登村の境界をなすポロヌプリ山(839m)と呼ばれる独立峯がある。この山を中心とする付近一帯は 明治時代末期の本邦鉱業史の一頁を飾った いわゆる『枝幸砂金』の出所として有名であるが 砂金を含めた地下資源一般の実態については案外知られていない。金属鉱業の今後の発展を期待することはかなりむずかしい地域ではあるが ここに砂金を中心に 地下資源開発の歴史やその実態を紹介するとともに 2・3の地質学的 鉱床学の問題点についてふれてみよう。

北海道における地下資源開発の芽生え

吹雪に明け暮れた長い冬のねむりからさめて 果てしなき原野によりやく春の息吹がよみがえる頃 猛獣の出没におののきながら 雪溶けの水を満々とたたえた急流をさかのぼり 白銀の峯をあえぎながら越えてゆく異様な風態の人影があった。先史時代の生活に欠くことのできなかった石器の原石となる 黒曜石・瑪瑙・碧玉・燧石などを探し求めて歩く 北海道先住民族のある日の姿である。

未開暗黒の北辺の大地によりやく近代文化の波の寄する頃 今を去る757年の昔 元久2年(1205年)筑前を出帆した一そうの船が 北海道の南端に当る 渡島国松前海岸に漂着した。そして水を求めて知内川に入った同船の炊夫が 偶然に 河中に塊金を発見した。このことはやがて当時権力の座に在った鎌倉幕府に伝えられ その後間もなく 甲斐の人荒木大守は 幕府の命を受けて 総勢約1,000人を率いて現地へ赴き 以後40余年にわたってこの地域の砂金を採取した。これが北海道における本格的地下資源開発のはじまりである。その後道内の地下資源は 先住民族との間に幾多の争いをくりかえしながら 次々に開発されていったのであるが どうやら鉱業態勢がとれるようになったのは それより約250年後のことであった。その後開発は急速に進み現在に至っている。

『枝幸砂金』の発見と開発

明治時代の中頃までは 枝幸町・浜頓別町は オホーツク海の荒海に豊富な魚群を追う漁船の根拠地として 平和に明け暮れていたし 中頓別町には わずかばかりの農地を開拓して ささやかながら平和な生活を送っている少数の人達が住を構えていた。が 明治29年(1895年)を境として これらの町は急に活気づき 町の様相は日ましに目まぐるしく変っていった。その原因をなしたものはいわゆる『枝幸砂金』である。

この年のある日 枝幸海岸に注ぐ溪流で 水草の根に附着した金粒が発見されたことが 土地の人々に伝えられた。当時砂金があることなど夢想だにしなかった地元の人々に驚天動地の思いを抱かせたこのニュースは間もなく道内に広がり これをいち早く聞きつけた砂金業者達は 多勢の採取夫を従えて 続々とこの僻地におもむき ウソタン川をはじめ ポロヌプリ山・珠文岳に源を発する河川の流域において砂金を採取した。これが当時世に広く喧伝された 『枝幸砂金』である。『枝幸砂金』は 明治32—34年を最盛期として 未曾有のゴールドラッシュを現出したが この頃には 砂金採取に従事する者の数も最高に達し 方々の現場で面白い事件が生れた。

最盛期にはウソタン川だけでも家族を含めて約9,000人が在住していたといわれているが その頃 中流付近で砂金を掘っていたものの中に 端目も羨むほど仲の良い夫婦があった。ある日の夕暮近く 夫の帰りを待ちわびていたこの奥さんは 夕餉の楽しさに心はずませながら 川辺で米をとき終って立ち上がった時 河原にキラッ と光る物に目を奪われた。日頃砂金を見なれている奥さんは 早鐘を打つような胸の鼓動をおぼえながら これを拾い上げた所大粒の見事な砂金であったからたまらない その場に へなへたとすわりこんでしまった。このことを夫に話して二人仲良くその付近を掘っていれば 目出度し目出度しとなって暮になるところ

であるが そうなつてはこの物語の面白味は失なわれる。しばらくして正気に戻った奥さんは 金の魅力に目がくらみ 夫に話すどころか その付近の砂金を一人占めしようとする。さあそれからというもの 夫も蜂の頭もあったものではない 毎朝上べだけの愛想笑で夫を送り出した後 人目を盗んでは 狂ったように砂金を掘り続けた。

あまり広いはいを一度に掘っては人に気付かれるので 自分の両肩が入る程度に掘り下げ 夕方になると大きな石でフタをしておいた。しばらく掘り下げた時に穴底に水が溜るようになったが すっかり有頂天になっている奥さんは それにかまわず 穴の中に頭を突込んで せっせと掘り下げていった。このようなことを繰り返しながら 砂金を溜めこんでは夢を見ていた奥さんはある日 例のようにして掘っている時 膝下の砂利がくずれたために身体がのめり 水の溜っている穴の中に頭から落ちこんで 逆立ちした格好のまま昇天してしまった。欲の皮がつっぱると祿なことはない。まったく嘘のような本当の話 今も その場所は「婆殺し」と呼ばれて 土地の人々に知られている。

当時の砂金採取事業の経営は 一般の鉱山のそれとは異なり 砂鉱権者が 鉱区の位置・砂金含有量の多寡 日用品類の価格などに応じて 半月または1カ月ごとに入場料を採取夫から現金または砂金で納入させ 採取夫各自勝手に場所を選ばせて採取させる方法がとられた。従って 入場料は場所によって まちまちであったわけである。

例へば 入場料として1カ月1人について納入された砂金は ウソタン川で3匁(11.25g)ののところもあれば1.6匁(6.00g)のところもあり ペイチャン川では1匁(3.75g) パンケナイ川では9分(3.38g)とまちまちであった。もちろん 入場料が 採取時期や盛衰につれて かなり変動したことはいうまでもない。採取夫たちは 日一日と砂金のたまっていくのを楽しみに働き続けたのであるが 人里を遠く離れた山中には 辛うじて疲れ切った身体を横たえる小屋があるだけで 娯楽設備もなく 夜ともなると うす暗いランプの下で お守袋に入れた砂金を元手にしてカケゴトに時のたつのを忘れ 人里が恋しくなれば 砂金を懐にして 山を越えては枝幸へ 川を下つては浜頓別や中頓別の町に出て遊興し 無一文になるとまた砂金を掘りに山奥へ帰っていったという。そのために これらの町々には豪壮な料理屋が立ち並び 弦歌の絶ゆることがなかったといわれている。

何時の世にもそうであるように 古参の砂金採取夫の中には 人一倍楽をして 人一倍もうけようとする者が居た。

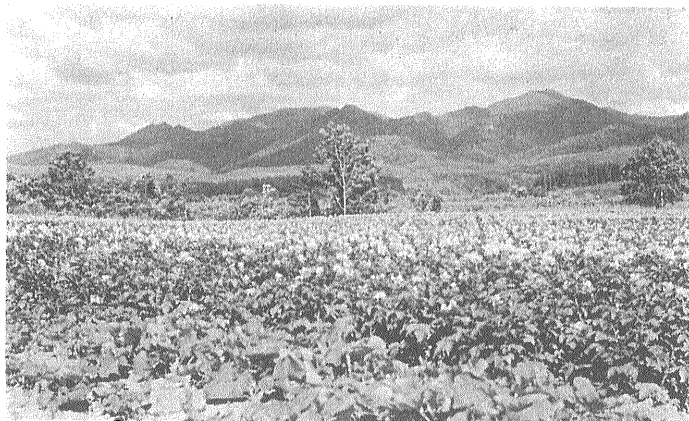
砂金は重いので 河床堆積物中では下部ほど多量に含まれているが 含有量の多い場所では 堆積物の基盤となっている岩盤の割れ目やくぼみに多量にたまっていることが多い。このことを経験的に知っている彼等は 経験の浅い採取夫が入山すると 日頃目をつけていた 比較的含有量の多い場所を教えて掘らせ 広いはいにわたって岩盤近くまで掘らせるとまた別の場所を教えて移動させ その後で 砂金掘りの本命といわれる「盤割り」(基盤の割れ目やくぼみにたまっている砂金を採取する方法で とくに割れ目にたまっている砂金を採取するために岩盤を割ることからこのように呼ばれるようになった)を行なって 楽に多量の砂金を入手した。結局 岩盤近くまで堆積している 厚い砂礫層を取り除く作業を 感謝されながら 人にやらせていたわけである。

発見後隆盛の一途をたどった「枝幸砂金」の産出は明治32—34年をその極として同37年頃からは次第に衰退し ついに同40年には休業せざるを得なくなった。同41年には再び採取がはじまり やや発展のきざしを見せたが約3年を経て休業の止むなきに至った。次いで大正2年(1913年)頃三度着手されたが 鉱況が好転しないばかりか 砂白金採取の影響もあって 間もなく休業した。昭和29年頃ウソタン川の一部で着手されたが 鉱況思わしくなく 短期間で休止され 発見以来50余年間 さまざまの人間模様いろいろられた「枝幸砂金」の採取もここに まったく終りをつげたわけである。

砂白金の発見と開発

明治23年(1889年)頃夕張川や空知川の砂金地帯に銀白色に輝く重い鉱物が含まれていることが判ったが それがどのような鉱物であるか不明のまま 不純物として捨てられていた。ところが同28年に 空知川の上流のトナシュベツという所で これとまったく同じ鉱物が見出され ころみに分析した結果 イリドスミンであることが判明して 砂金業者の注目を浴びた。

「枝幸砂金」地帯でも少量のイリドスミンが採取夫たちに知られていたが 量が少ないので 不純物として捨てられていた。ところが思いがけないことから頓別川の西側の河川流域に多量のイリドスミンが賦存していることが判った。現在では急行列車が走っている天北線の開通工事が行なわれていた頃のことであるが この工事に使役されていた一人の人夫が きびしい労働条件に耐えかねて脱走し 頓別川に注ぐ沢の上流に逃げこんで



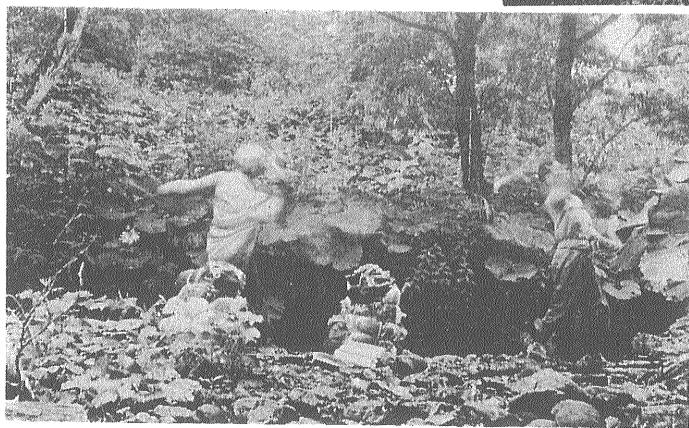
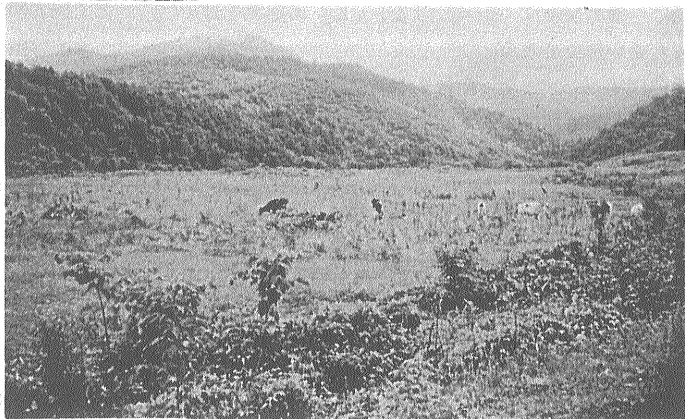
←

山ろくのバレイシ。樹 見た目には美しいが
成長は南部のものよりも 1カ月以上も遅く実収
率は低い 大半がデンプンの原料となっている
(中頓別の南方豊泉付近)

→

下半部の平な部分は洪積層 左側のなだら
かな山は新第三紀層 前面の高い山は先白
亜紀層によって それぞれ構成されている
部落の周辺では洪積層の分布区域が牧場と
して利用されているが 時々熊におそわれ
て行方不明になる牛馬もある

(平賀内川下流)

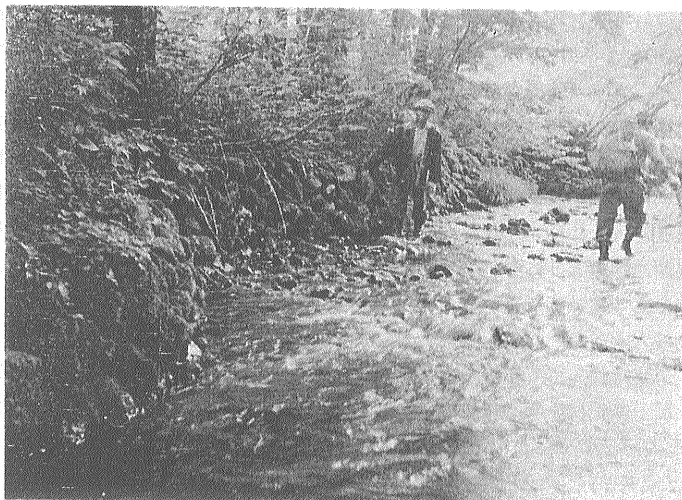


←

山奥で 熊がひんぱんに出沒する付近では発音花
火を投げて 熊の襲撃を防ぎながら調査を進めて
いく
(中川上流)

→

砂金採取の跡 左側の石垣は流路を変え
るために築かれたもので 時には10km以
上にわたって断続し 往時の栄華の跡をと
どめている (ペイチャン川)



山菜と川魚とで空腹をしのぎ 粗末な小屋で雨露をしのぐ生活を送っていたところ 或る日 偶然に 沢の中に多量のイリドスミンがあることを見つけた。それから後の彼は 狂ったようにイリドスミンの採取に没頭し やがては莫大な財をなしたといわれているが 当地を去った後のことは明かでない。

せっかくつかみかけたしあわせを 欲望に目がくらんでとり逃がしたばかりか 自らを十萬億土の旅路をたどらせる運命に追いやった砂金掘りの奥さんとまったく对象的に 彼の場合は「災い転じて福となる」の格言を地であったよい例であろう。

昭和15年(1940年)頃 前後3年間にわたった当地域のイリドスミン採取は 各河川の流路が短かいために鉱量に制限があり ついに休止されるに至った。

山 金 時 代

砂金採取の末期に近い大正3年(1914年)に 尻無川の砂金分布の上流限界に近い山腹に 北見鉱山の含金銀石英脈が発見されて世人の注目を浴びた。砂金にそろそろ限界が見えてきた頃 このニュースは 当然 人々の眼を次の目標に向けさせた。そして この地域の鉱業は 砂金時代を経て その根源と目される山金の発見開発に転換発展の道をたどったのである。この頃になると 身の危険をかえりみず 山金を探し求めて 山中深く分け入る人の姿がみられるようになり ついに 昭和2年(1927年)には枝幸鉱山の鉱床が 同9年には神野鉱山の鉱床が発見されたのである。しかし いずれの鉱床も規模が小さく かつ 採掘開始後間もなく下部は貧鉱化し 僻地に位置する立地条件の悪さと相まって 時を経ずして休山のやむなきに至った。これらの鉱山の中 枝幸鉱山は 約10年間稼行され 現地製煉を行なって 金の延棒を出したということであるが 現地を訪ずれば 坑内から出された研の量から推察すれば きわめて小規模に採掘されたものであろう。現在は 真赤に錆びた MADE IN ENGLAND の銘の入った機械部品が散在し 当時の面影をとどめているにすぎない。

神野鉱山の発見は それまでうす暗いランプ生活を送っていた中頓別町に明るい電燈を灯し 町の人々からその発展が大いに期待された。しかし この鉱山のたどった運命はあまりにも苛酷であり その哀史は 鉱山に興味をもつ富限者に良い教訓を残すとともに 今もなお土地の人々の深い同情をかっている。昭和12年(1937年) 当時旭川でも指折りの富限者として知られていた K氏は 某氏にすすめられるままに 神野鉱山の経営に

乗り出したが あまりにも恵まれた環境に育ったせいか 無類の人の好きと 鉱山に対する知識の乏しさが災して 休山した同17年に至る約5年間に財産のほとんどを費消してしまった。その額は 時価1億円以上といわれている。この間には若干の金を産出したことは確かであるが それもK氏の手にはほとんど入らなかったということである。しかし この間鉱山に関係した人達の中には多額の財を得た人もあるという。わずか5年間に神野鉱山を舞台として繰り広げられた歴史は K氏の犠牲の上に立ち おのれの欲得のみを考えて暗躍した みにくい人間像によってえがかれたものにほかならない。

その詳細を知るにおよび義憤を禁じ得ないのであるが 故人となったK氏の生前の温厚な人柄を偲ぶとき 今ここにそれを詳述するに忍びがたい。

谷をさかのぼり 人里を遠く離れた鉱山にたどりつけば 未だ使用しない 真赤に錆びたさく岩機のビットやワイヤロープ 製煉・搗鉱機の部品などが散在し 朽ち果ててわずかに柱のみを残す製煉所の残骸などが夢の跡をとどめ 一しおあわれである。

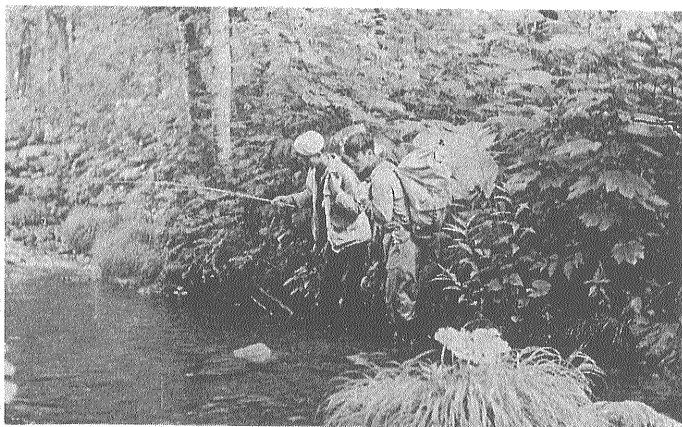
地下資源開発の末期と現在

第二次世界大戦勃発の翌年 昭和17年(1942年)になると 軍需産業の活発化につれて資源開発はいよいよ急を告げ 同18年には 従来の産金第一主義を捨てて 軍需資材の増産態勢を確立するために 金鉱業整備令が出され 道内では鴻の舞・千歳・沼の上・音羽の4鉱山を残す30余の金山の施設・資材・人材は配置転換を余儀なくされたのである。そして枝幸砂金地帯における本格的探鉱もこれによって終始符が打たれたわけである。

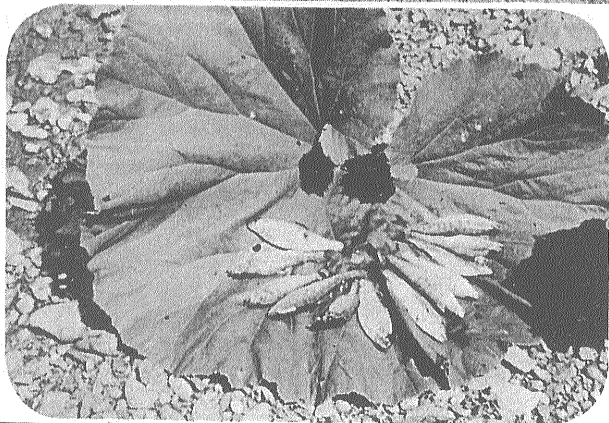
戦後も鉱業開発に懸命の努力がはらわれ 水銀・銅・硫化鉄・クローム等の鉱床が数カ所に発見されたが いずれも小規模のため 未着手かまたは一部探鉱されたものも間もなく操業は休止された。現在は 一部において 砂金やイリドスミンが きわめて小規模に 時折採掘されているにすぎない。

本地域の鉱業に今後多くを望むことは 諸般の事情からみて むづかしい。しかし 砂金発見以来66年後の今日に至る間 当地において行なわれた地下資源の開発努力は 地質・鉱床学を志す人々に 大きな問題点を投げかけたと見てよいであろう。そして 鉱床との関係より見て 先白亜系の構造・砂金の根源・鉱床生成時期と火成岩との関係等については 研究の余地が多分に残されていると見なければならぬ。次に これらの問題についてそのあらましを述べてみよう。

→
 単調な奥地の調査では 人夫たちは神経質
 となり仕事になげやりになってくる それ
 で暇を見ては気をまぎらわせるために 魚
 を釣らせ食糧確保との一挙両得をねらった
 (中ノ川上流)



→
 たびたび食膳に上った「ヤマベ」塩焼きやフライに
 するとものごうまい 一説によれば鱒のオスと
 言われているが そうでないという人もいる 9
 月の末頃になると海から鱒が産卵のために上ってく
 るが この頃になると美しい体色が黒っぽく変色し
 (俗に紋付を着るといふ) 味はおちて食べられな
 くなる 鱒が生みつけた卵に白子をかける姿がみら
 れるということであるから やはり鱒のオスかも知
 れない 紋付を着て女性を迎えるヤマベは 一部
 の人間よりはよほど礼儀正しい (ペイチャン川)



←
 奥地調査の途中 空模様があやしくなったので砂
 金小屋へ避難した 到着後まもなくどしゃぶりとな
 ったのでしばらく待機した
 中食には人夫が釣ったヤマベが料理され 食膳を
 にぎわした (ペイチャン川)



←
 金・水銀・クローム・イリドスミン等の砂鉱の存
 否を知るためにスコップを用いて簡易パニング
 を行なった
 上手な人がやると 梶を使用した場合とくらべ実
 収率はほとんど変わらない (藤井部落)

先白亜系を中心とした地質と構造

ポロヌプリ山を中心とする付近は 日高帯西縁の北方延長部にあたり 地質は下部より先白亜系・白亜系・新第三系・第四系ならびに新旧火成岩類によって構成されている。(第1図)

砂金賦存地域を構成している先白亜系は ポロヌプリ山をほぼ中心として 東西約13km 南北約26km にわたって分布しており 以前は古生層として取り扱われ 本州の秩父古生層中位の層準に相当すると解釈されたこともあったが その後 石灰岩中の化石によって 少なくともその一部が中生代の地層であることが判明した。しかし全体についての時代区分は未解決となっている。

先白亜系は 岩相によって ポロヌプリ層・ペイチャン層・ピラガナイ層に区別され ピラガナイ層は北東—南西方向の断層によって他の2層と境されている(第2図) かつて 砂金採取のはなやかな頃 これら3層の層序について 福地信世は下部からペイチャン統・パンケナイ統・オネンカラマブ統 (これらはそれぞれポロヌプリ層・ペイチャン層・ピラガナイ層にほぼ相当する) とし 西尾銆次郎は オネンカラマブ統・ペイチャン統・パンケナイ統と解釈して 両者ははげしく対立した。

この問題は その後結着をみないまま現在なお明かにされていないが ただ層序関係だけではなく それぞれの堆積時期に行なわれた火成活動(輝緑岩・輝緑凝灰岩)の推移のうかがい知る上においても重要視されるので 今後の研究に期待される。

幾度か現地調査を行なって知り得た事実と従来の数少ない資料とによって ポロヌプリ山塊の先白亜系の構造は ポロヌプリ山付近を通る背斜構造 ピラガナイ層の分布を大きく支配する背斜構造 ならびにペイチャン川の大曲部を通る向斜構造などによって特長づけられ 総体的には ポロヌプリ山—珠文岳をほぼ中心として大きくもり上っていると推察されるに至った。(第2図) このような構造の存在は ポロヌプリ山塊西側を 先白亜系を削って流れる河川の流路形態によっても或程度想定される(第2.3図) そしてこのもり上っている部分は他の部分よりも 多く削剝されていることが ポロヌプリ層の上位にあるべきペイチャン層がポロヌプリ山を通る背斜構造の軸部付近に分布しないことからみても 容易に推察される。

古期火成岩類としては 先に挙げたもののほかに 一部に残留式クローム鉱床を形成し 頓別川流域に分布する砂クロームの供給源をなし また一部の水銀鉱床と成

因的關係をもつと考えられている蛇紋岩とこれの分化脈岩として微閃緑岩がみられる。

新期火成岩類としては 新第三紀中新世中後期の火成活動による 流紋岩・安山岩などがある。これらの中 鉱化作用と直接に關係をもつ流紋岩は 日高帯と神居古潭帯との境界部に溶岩円頂丘をもつ秀麗な敏音知岳を形成し ポロヌプリ山塊の南東方では黒岩山塊との間に分布して その活動が基盤の特長ある構造に規制されて行なわれたことを暗示している。

鉱床学的問題点

ポロヌプリ山塊は 北海道における鉱床生成区分上 新第三紀中新世の流紋岩を主体とする新期火成岩類に成因的關係をもつ多くの鉱床群によって形づくられている。いわゆる北見鉱床区の北端部にあたっている。そして 金・銀・水銀・銅硫化鉄・クロームなどの鉱床が分布しているが これらを鉱床学的立場から見た場合 二つの大きな問題がクローズアップされる。それは砂金の根源とその鉱化作用ならびに水銀の鉱化作用に関する問題である。これらの問題について 従来どのように考えられていたか またどのように解釈すれば無理なく説明することができるかを かいつまんで 次に述べてみよう。

砂金の根源とその鉱化作用

『枝幸砂金』がどこから供給されたか また その根源がいつどこにどのような火成岩と成因的關係をもって形成されたかなどについては 現在なお明快な解答は得られていない。

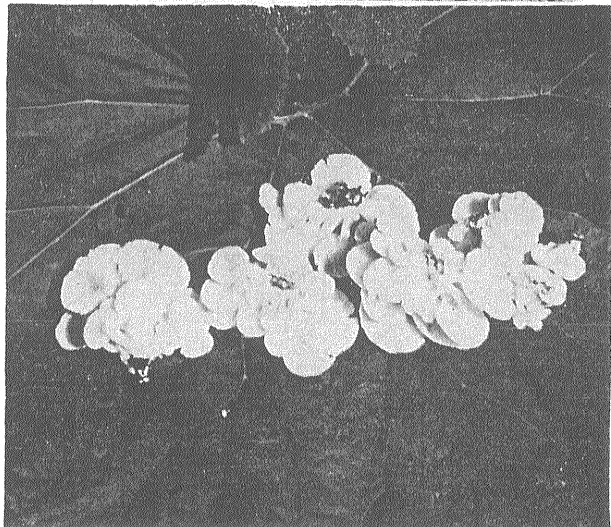
まず砂金がどこから供給されたかを知る一つの手段として 各河川における砂金の分布や砂金の性質を 現地調査 文献ならびにかつて砂金採取に従事した者からの聞きこみなどによって調べ 各河川における砂金分布の上流限界をとらえて 地形図上にプロットするとともに 以前に採掘された金銀鉱床の正確な位置を 現地調査を行なって 同図上にプロットした(第3図) その結果既採掘の金銀鉱床が砂金分布の上流限界近くや それよりもやや上流に位置していること および砂金は 下流では『赤金』(他の成分をあまり含まない 純粋に近い金)が多いが 上流へゆくに從つて『青金』(他の成分 例えば銀などをエレクトラムの形で含み 青味をおびた金)が次第に多くなり 上流限界付近では大部分が『青金』であることなどが判った。このような 砂金と金銀鉱床の分布状態および砂金の性質の分布上の差異は 一応 既採掘鉱床が砂金の根源の少なくとも一部をなしていることを示していると見てよいであろう。

→
神野 鉦山
製煉所跡



←
町役場の強い要望に応じて 水銀鉦床調査でパ
ックサックを使用して試錐を行ない 鉦脈の連
続状態を確認した
右側の人物は素人相撲の大関で 左側は砂金掘
りの名人といわれている K氏
(中頓別水銀鉦山)

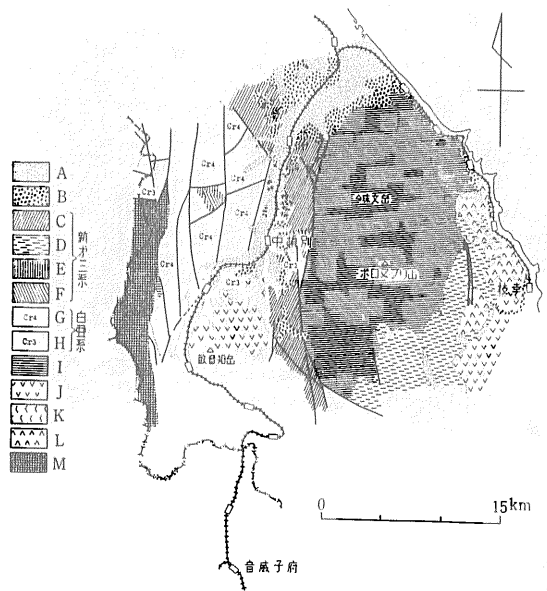
↓
時々黄色い茸が倒木に密生していることがある
この茸は「たまご茸」と呼ばれ時々夕食の食膳
をにぎわしてくれたが 時には1本の木に数kg
も生えている (中ノ川上流)



た ま ご 茸



た ま ご 茸 の 群 生



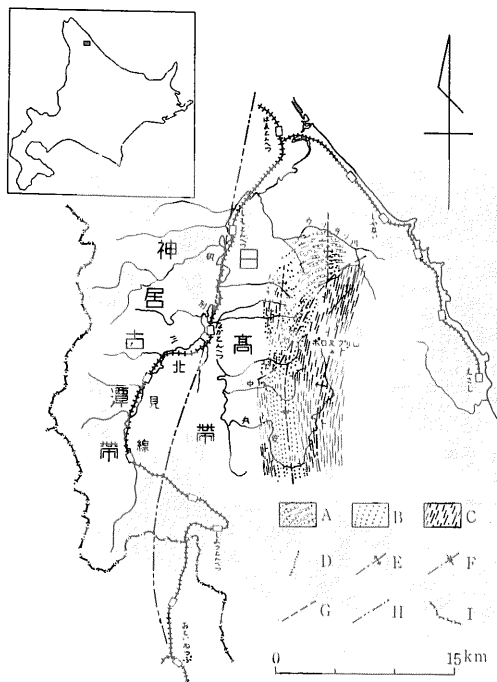
第1図 枝幸郡中頓別付近地地質概念図
 A. 沖積層 B. 洪積層 C. 稚内層 D. 藻興部層
 E. 福山層 F. 羽幌亜層 G. 函淵層 H. 上部蝦夷層群
 I. 先白亜系 J. 流紋岩 K. 玄武岩 L. 安山岩 M. 蛇紋岩

もし そうであるならば 過去に採取された砂金の量から見て その根源の大部分はすでに削剝されてしまっているに違いない。このことは 先に述べた先白亜系の構造と現在の地層の分布から見ても 容易に推察することができる。

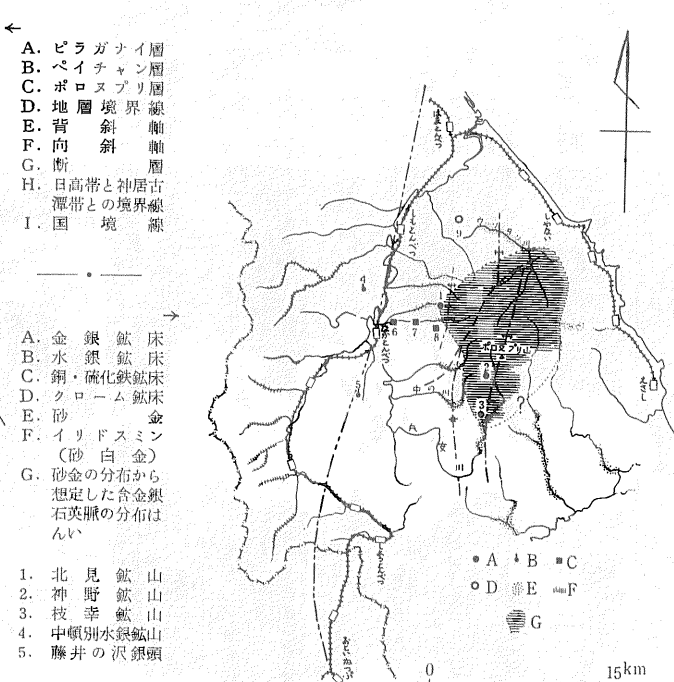
このようなことを考えながら既知鉱床の調査を行なっ

た結果や稼行当時の記録などによって どの鉱床も (1) 主鉱脈はほぼ南北方向の走向をもち 小規模であるとともに着手後間もなく品位が低下して採掘が困難となったこと (2) 既知鉱床付近や その他の場所でも砂金分布の上流限界付近やその上流に 構造運動に伴って生じた分泌石英脈とは異った 細い不毛石英脈や 時にわずかの金や鉱染状に黄鉄鉱を含む細い石英脈が賦存すること (3) 鉱床付近には新期火成岩類が認められないこと (4) 金鉱石の性質が中新世の流紋岩に成因的關係をもつ北海道金山の鉱石と異っていることなどを知り得た。これらのことから 当地域の砂金が 先に述べた大規模の背斜軸付近に賦存するであろう 含金銀石英脈を根源としその削剝によってもたらされたことはもはや疑う余地のないところであろう。

さてそれならば 含金銀石英脈は どのような場所に何時 どのような火成岩に關係して形成されたのであろうか。まず 含金銀石英脈胚胎の場が地質構造とどのような關係にあるかということは第2図がよく示している。この図に示されたように それらが 先白亜系の構造を大きく支配する南北方向の背斜軸やこれに平行の背斜軸付近に賦存し しかも鉱脈の構造が背斜構造に従属的であることは 背斜構造形成の末期に形成された褶曲裂罅に対して鉱化作用が選択的に行なわれた結果生じたことをよく示している。その鉱化作用の時期および關係火成岩が何であるかは 実際に現地を調査しても鉱床と成因的に関係があると断定される火成岩の存在が認め



第2図 ボロムプリ山周辺の地質構造概念図



第3図 鉱床分布図

1. 北見 山 山 山
2. 神 野 山 山
3. 枝 幸 山 山
4. 中頓別水鏡山
5. 藤井の沢銀頭

られないので 今もって謎につつまれているが 鉱床付近に 中新世の鉱化作用にもっとも大きな役割を果たした流紋岩や安山岩が認められない事実は 鉱床がこれらの火成岩類とは関係なく形成されたことを示しているとみなさなければなるまい。日高造山運動に伴われた深成活動によって 花崗岩質岩が大規模につくられたとみなされるこの地域で 含金銀石英脈の鉱化作用を花崗岩質岩に関係づけることは無理であろうか。

これまでに知り得たいろいろの事実からは 白亜紀末に行なわれた日高造山運動によって ポロヌプリ山塊は強く押し曲げられて 大規模の背斜構造がつくられ その末期に形成された褶曲裂罅に対して 当時下部深所でつくられていた 花崗岩質岩に関して鉱化作用が行なわれて大規模かつ高品位の含金銀石英脈が多数形成されたが これらは その後長い年月にわたって剝削流出されて 下流に膨大な砂金地帯をつくり 現在ではわずかにその最下部をとどめているとみなすのが もっとも無理がないようである。

水銀の鉱化作用

従来 北海道中央山脈沿いに分布する水銀鉱床は 白亜紀末に 蛇紋岩の火成活動に伴われて形成されたと解釈された場合が多かった。中頓別付近では 日高帯と神居古潭帯との境界付近に 中頓別水銀鉱山の鉱床をはじめ幾つかの水銀の露頭が知られており 確かに蛇紋岩と成因的に関係が有ると考えられるものもあるが 中には 従来の解釈をまったく否定するものもみついている。敏音知岳の北方にあたる藤井の沢の上流にみられる露頭は 流紋岩の割れ目に辰砂が鉱染状に含まれたも

ので 蛇紋岩とは成因的に何ら関係を有しないし 中頓別水銀鉱山の鉱床の近傍には蛇紋岩の露出は認められない(深部にあるかどうかは明かでない)

一方 平賀内川下流には3カ所に銅硫化鉄の露頭が知られているが これらは 西から東へ向って 磁硫鉄鉱・硫砒鉄鉱・黄銅鉱・黄鉄鉱→黄銅鉱・黄鉄鉱→鉱染状黄鉄鉱のように 鉱石組成鉱物を異にし 生成温度が低くなったことを示している。

このようなことと新期火成岩類の活動の構造的位置などをあわせ考えれば これらの鉱床は その胚胎の場となった剪断帯を形成した構造運動と流紋岩に関係した鉱化作用によって生成されたと考えた方が無理なく説明することができる。

む す び

以上 〱枝幸砂金、地帯の地下資源に関してあらましを述べた。わびしい 北辺の地に夢と希望をもたらした 〱枝幸砂金、も命短にしてつき 今は 往時の榮華をしのばせる何物もなく 深山の谷合に断続する採取現場跡の苔むした石垣だけが わずかに当時の名残りをとどめているにすぎない。

今後 鉱業に生きる望みもうすいこの地域では 経済成長の道を酪農に求めつつある所もあり 木材の出荷に力を注いでいる所もあるが 一方 自分が漁した魚を口にもすることもままにならないことさえあるといわれるオホーツク海沿岸に点在する漁村は 自活の道をどこに求めたらよいのであろうか。オホーツク海をおおいつけて低くたれこめた暗雲と 叩きつけるような冷雨がこの地域の今日の姿を物語っているようである。

(筆者は 鉱床部 金属課)



オホーツク海岸に点在する漁村 冷雨降る日 肥料用の魚を煮るかまどから細々と煙が立ちのぼる風景は一入わびしく 訪れる人の胸を打つものがある